

— 野 菜 —

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】		
アザミウマ目	アザミウマ類*	トマト	虫数調査を行った花から生育した20~100果	10株程度 地這いの場合は10つる程度	1回:果実肥大期		
			各区任意の10花以上				
			株の下・中位葉2-3葉 発生不均一の場合は増やす				
		なす	株の下・中位葉2-3葉 発生不均一の場合は寄生葉を マークし、その葉を調査				
			各区任意の10花以上				
		ピーマン とうがらし類	株の中位葉から1株2-3花 未開花の場合は、1株2-3垂主 枝の芯葉				
			散布:株の中位部から葉位を変 えて2-3葉を調査する 発生不均一の場合は寄生葉を マークし、その葉を調査 粒剤等:調査株全体、葉が多い 場合は頂葉から10葉				
		きゅうり メロン すいか その他うり類 いんげん	散布:株の中位部から葉位を変 えて2-3葉を調査する 発生不均一の場合は寄生葉を マークし、その葉を調査 粒剤等:調査株全体、葉が多い 場合は頂葉から10葉				
		キャベツ カリフラワー ブロッコリー 各種あぶらな科葉菜類 レタス セルリー	各株の中-外葉2葉程度 状況に応じて、株全体			10-20株程度	
		たまねぎ ねぎ にら にんにく らっきょう	各株の中心2-3葉			20-30株	処理前と最終調査時
						20-100株	
		ほうれんそう	調査株全体			40-100株	散布:1-2回、(散布前)・発芽35-40日後 (散布時に被害がある場合は散布前調査を実施)
10-20株	散布:1回、最終散布3-10日後						
いちご	各区任意の10花以上	-	散布:3回(4回)、散布直前・3・7・(14)日後 粒剤等:4回、定植7・14・21・28日後				
花卉類	調査株全体、栽培形態が異なるので調査株が大きい場合は 任意の葉・シュート・花など	栽培状況によっ て、株数は任意	散布:3回(4回)、散布直前・3・7・(14)日後 粒剤等:4回、定植7・14・21・28日後				

* : 類表示の害虫種については、発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 20)

調査項目・内容	備考	報告事項
白ぶくれ果数		白ぶくれ果数・白ぶくれ果率 白ぶくれ果率の対無処理比
成虫数	ヒラズハナアザミウマの場合	雌成虫数 散布:補正密度指数 粒剤等:密度指数
幼虫数・成虫数	ミカンキイロアザミウマの場合	
種別で全生虫数(成虫・幼虫) (幼虫は同定困難だが、成虫は種別で調査) ミカンキイロ・ヒラズハナの花調査は、エタノール抽出等により実体顕微鏡下で調査 ミナミキイロ・ネギは、見取り調査	A)虫数調査中心	成虫数・幼虫数 散布:補正密度指数 粒剤等:密度指数
株ごとに被害程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(1):被害が散見される 中(2):被害が中程度 多(3):被害が多程度	C)状況に応じて調査を検討	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
株ごとに被害程度を4段階調査 無(0):全葉に被害がない 少(1):被害葉が1枚 中(2):被害葉が2-3枚程度 多(3):半数以上が被害葉	A)被害調査中心 散布は生育初期から2-4回 発芽揃い期から1-2葉期に1回目散布 少発生時は被害の散見され初めに1回目散布でもよい	
種別で全生虫数(成虫・幼虫) (幼虫は同定困難だが、成虫は種別で調査) 見取り(花の調査はエタノール抽出等により実体顕微鏡下で調査)	C)状況に応じて調査を検討 被害が既に発生しており、寄生虫数が十分に認められる場合	成虫数・幼虫数 散布:補正密度指数 粒剤:密度指数
種別で全生虫数(成虫・幼虫) (幼虫は同定困難だが、成虫は種別で調査) 見取り(花の調査はエタノール抽出等により実体顕微鏡下で調査)		成虫数・幼虫数 散布:補正密度指数 粒剤等:密度指数

備考中のアルファベット：
 (調査法 21) A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
 B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
 C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】	
カ メ ム シ 目	ア ブ ラ ム シ 類 *	トマト なす ピーマン とうがらし類 きゅうり すいか メロン うり科	株もしくは主枝の中位部から葉位を変えて2-3葉を調査する 発生不均一の場合は寄生葉をマークし、その葉を調査	10株程度 地這いの場合 は10つる程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後	
		だいこん はくさい キャベツ カリフラワー ブロッコリー あぶらな科野菜類	全葉あるいは任意の一定枚数	10株程度		
		ねぎ にんにく たまねぎ	調査株全体	20株		
		ごぼう	全葉あるいは任意の一定枚数	10-20枚の葉 生育初期の場合 は10株		
		レタス しゅんぎく		10株以上		
		ほうれんそう	調査株全体	10-30株		
		さといも	多発生の場合は, 株当たり1-2葉 少発生あるいは株が小さい場合は調査株全体	10株程度		
		かんしょ	上位展開葉3枚までのシュート	10-30本		
		やまのいも	調査株全体	10株程度		
		いちご	調査株全体	10株程度		
		花卉類・観葉植物	調査株全体 栽培形態が異なるので調査株 が大きい場合は任意の葉・ シュート	10株ないし10箇 所以上		
		ばれいしょ	1株5複葉	10-20株程度		散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:3-4回, 植付時処理の場合は萌芽10・ 20・30日後, 生育期処理の場合は処理直後7・ 14・21・28日後
		だいず その他豆類	調査株全体 多発生の場合は各5複葉でも 可	10-20株程度		散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:3-4回, 植付時処理の場合は萌芽10・ 20・30日後, 生育期処理の場合は処理直後7・ 14・21・28日後
		セルリー	調査株全体あるいは, 発生が 多い場合は任意の葉数	10株程度		散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後
		にんじん	調査株全体, あるいは任意の 株数より抽出した葉, 数枚	20株以上		散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:播種20-70日後(複数回)
		パセリ	調査株全体, あるいは任意の 株数より抽出した数枝	10株以上		散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後
		オクラ	任意の株数から展開葉2-3枚 (計10-30葉以上)	5-10株以上		
		こんにゃく	調査株全体, あるいは任意の 株数より抽出した30小葉/株	10-30株程度		散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:定植60-100日後程度(複数回)
		れんこん	葉, 茎葉	3-10葉 (小規模:10-20 茎葉)		散布:3回(4回), 散布直前・3・7(14)日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 22)

調査項目・内容	備考	報告事項
種別で全生虫数(有翅・無翅虫)	粒剤等土壌処理試験で有翅虫の飛び込みが非常に多い場合は、無翅虫のみで判定することも検討する	有翅虫数・無翅虫数 散布:補正密度指数 粒剤等:密度指数

(調査法 23)

備考中のアルファベット：

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
カメムシ目	アブラムシ類*	その他 樹木類	葉・枝・幹	1枝-1樹 樹齢や状況に よって対応	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
	カイガラムシ 類*・ロウムシ	樹木類	枝・幹		散布:2回, 散布直前・14日後
	カメムシ類*	だいず 豆類	調査株全体	10株程度	複数回散布:複数回, 散布直前・散布2-3日 後および最終散布後 散布は7-10日間隔で2-3回
			子実	30茎(多発生の 場合は10茎でも 可)	散布:1回, 収穫期
		ピーマン・なす	調査株全体	5-10株	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
	カスミカメ類*	なす	新芽(1芯3葉)	50茎	散布:3回, 散布直前・14・21日後
		アスパラガス	調査株全体	2-4養生大株 10-20茎	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
	カンシャコバ ネナガカメム シ	さとうきび	中位の茎	10本	2回, 処理直前・7日後
	グンバイ類*	樹木類	枝・葉	1-2枝 つつじなどでは 5-10新梢	3回, 散布直前・3・7日後
	コナジラミ類*	トマト なす きゅうり メロン すいか その他うり類 オクラ	成虫:寄生密度の高い葉群 成虫以外:発生している各態が 含まれるように, 高さを異にして 系統的に葉位を抽出	10株程度 地這いの場合 は10つる程度	散布(成虫):4回, 散布直前・処理1・7・14日後 散布(成虫以外):3回, 散布直前・7・14日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後 発生状況等で長期調査 ※成虫放飼の場合は, 幼虫寄生が認められ てから試験を開始すること
		かんしょ	成虫:寄生密度の高い葉群 成虫以外:発生している各態が 含まれるように, 中位葉から任 意の葉数を抽出	10株程度	
		いちご	成虫:任意の1-3複葉 成虫以外:発生している各態が 含まれるように葉位を抽出		散布(成虫):4回, 散布直前・処理1・7・14日後 散布(成虫以外):3回, 散布直前・7・14日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後 発生状況等で長期調査 ※成虫放飼の場合は, 幼虫寄生が認められ てから試験を開始すること
		花卉類・観葉植物	成虫:寄生密度の高い葉群 成虫以外:発生している各態が 含まれるように, 中位葉から任 意の葉数を抽出	栽培状況によっ て, 株数は任意	
		樹木類	葉・枝・幹	1枝-1樹 樹齢や状況に よって対応	

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 24)

調査項目・内容	備考	報告事項
種別で全生虫数(有翅・無翅虫)	粒剤等土壌処理試験で有翅虫の飛び込みが非常に多い場合は、無翅虫のみで判定することも検討する	有翅虫数・無翅虫数 散布:補正密度指数 粒剤等:密度指数
種別・ステージ別で全生虫数		成虫数・幼虫数 補正密度指数
種別で全生虫数(成虫・幼虫別)	B)発生種と発生程度を調査する	成虫数・幼虫数 補正密度指数
被害粒, 被害莢(板莢)	A)被害調査中心	被害粒数・被害粒率・被害莢数・被害莢率 被害粒率・被害莢率の対無処理比
全生虫数(成虫・幼虫)		成虫数・幼虫数 補正密度指数
被害芽数調査または葉・新芽ごとの被害程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(0.5):1葉に軽微な被害 中(3):2-3葉に被害 多(5):茎頂部が奇形による芯止まり	A)被害調査中心	被害芽数・被害芽率または指数別芽数・被害度 被害芽率・被害度の対無処理比
成虫・幼虫数 (払い落とし)	C)状況に応じて調査を検討	成虫数・幼虫数 補正密度指数
若茎ごとの被害程度を4段階調査 無(0):吸汁痕なし 少(1):吸汁痕が見られるが、商品性に問題なし 中(2):吸汁痕が目立ち、商品性が低下 多(3):若茎全体に吸汁痕が見られ、曲がり等が発生して商品性が著しく低下する	A)被害調査中心	指数別若茎数・被害度 被害度の対無処理比
全生虫数(成虫・幼虫)	現場での調査と別に区外から茎10本を持ち帰り、幼虫の齢構成を調査	成虫数・幼虫数 補正密度指数
全生虫数(成虫・幼虫)		成虫数・幼虫数 補正密度指数
種別で全生虫数(ステージ別)・脱皮殻 成虫以外:リーフディスクまたは小葉を任意の葉位から採集し、実体顕微鏡下で全生虫数をステージ別で調査する		
種別で全生虫数(ステージ別)・脱皮殻 成虫以外:リーフディスクを任意の葉位から採集し、実体顕微鏡下で全生虫数をステージ別で調査する		成虫数・幼虫数(ステージ別)・卵数・脱皮殻 成虫と成虫以外(卵は含まない)は別に集計 散布:補正密度指数 粒剤:密度指数

備考中のアルファベット：

(調査法 25)

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
カメムシ目	ヨコバイ類*	いちご	調査株全体	10-30株	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
		レタス	調査株全体	40株以上	散布:2回, 散布直前・散布14日後
	アオムシ	だいこん はくさい キャベツ カリフラワー ブロッコリー 各種あぶらな科野菜類 花卉類	調査株の全葉	10株程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後
チヨウ目	アズキノメイガ・マメノメイガ	あずき いんげん	茎葉・莢	50株程度	1回, 収穫期 散布は産卵盛期に1回目を行い, 2回散布すること
	アワノメイガ	とうもろこし	雌穂、茎	20~30株	1回, 雌穂収穫(初期) 散布は雄穂抽出期に1回目 雌穂絹糸抽出期に2回目
		しょうが	茎部	15株以上	散布:複数回, 散布直前・7・14・(21・28)日後 散布:1回, 最終調査日
	イモコガ	かんしょ	葉	発生量に応じて 20-30株か1-2m ² (1m ² の正方形の 木枠を用いて)	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
	ウコンノメイガ	だいず えだまめ	葉	20-50茎	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
	ウラナミシジミ	えんどう その他豆類	莢	5-10m程度の畝 範囲	散布:3回, 散布直前・7日後・14日後
ウリノメイガ (ワタヘリクロ ノメイガ)	きゅうり メロン すいか その他うり類	調査株全体	10株(つる)程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後	
ウワバ類*	キャベツ カリフラワー ブロッコリー あぶらな科野菜類 レタス 花卉類	調査株全体	10株程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後	

* : 類表示の害虫種については、発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 26)

調査項目・内容	備考	報告事項
全生虫数(成虫・幼虫)		成虫数・幼虫数 補正密度指数
被害株数・株ごとの被害(葉の湾曲症状)の程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(1):わずかに湾曲 中(2):1/3-1/2湾曲 多(3):1/2以上が湾曲	カキノヒメヨコバイ	被害株数・指数別被害程度・被害株率・被害度 被害株率・被害度の対無処理比
萎黄病の発病株数	ヒメフタテンヨコバイの媒介する萎黄病が防除対象	発病株数・発病株率 発病株率の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)・蛹数	蛹数は評価に用いない (蛹化直前は移動性が高いため)	幼虫数(ステージ別)・蛹数 散布・補正密度指数 粒剂等:密度指数
被害茎数・被害莢数 抜き取って調査		被害茎数・被害莢数・被害茎率・被害莢率 被害茎率・被害莢率の対無処理比
雌穂寄生数 被害茎数 被害雌穂数	A)寄生虫数調査中心 B)被害茎数調査 オオタバコガが混発した場合,可能な範囲で種別に分けて調査する	雌穂寄生虫数、被害茎数・率、被害雌穂数・率 雌穂寄生虫数・被害茎率・被害雌穂率の対無処理比
被害茎・総茎数	A)被害調査中心	被害茎数・被害茎率 被害茎率の対無処理比
幼虫数 (分解)	C)状況に応じて実施 最終日まで経時的に虫糞排出を指標とする場合もある	幼虫数 密度指数
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別) 本種幼虫は葉をつづり合わせているので,被害葉を解体調査を行う		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
葉巻数	発生状況によっては省いても良い	葉巻数・葉巻率 葉巻率の対無処理比
全生虫数(ステージ別)	虫数調査	幼虫数 補正密度指数
被害莢(各調査日ごとに除去)		被害莢数・被害莢率 補正した被害指数
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)・蛹数	A)虫数調査中心	幼虫数(ステージ別)・蛹数 補正密度指数
株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):食害無し 少(1):食害面積が葉の10%未満 中(2):食害面積が葉の10-30% 多(3):食害面積が葉の30%以上	C)状況に応じて調査を検討	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)・蛹数		幼虫数(ステージ別)・蛹数 散布・補正密度指数 粒剂等:密度指数

備考中のアルファベット:

(調査法 27)

- A) 2つ以上調査項目があり, 判定の主たる調査
B) 2つ以上調査項目があり, 判定の参考となる調査
C) 2つ以上調査項目があり, 状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
チヨウ目	キアゲハ	にんじん	調査株全体	3-10m ² 20株以上	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
	ケムシ類*	樹木類	枝・葉	1-2枝	
	コナガ	だいこん はくさい キャベツ カリフラワー ブロッコリー あぶらな科野菜類	調査株の全葉	10株程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後
	サヤムシガ*	だいず その他豆類	莢・子実	30茎(多発生の 場合は10茎でも 可)	散布:1回, 成熟期 散布は莢伸長期-莢肥大期に2-3回行う
	シロイチモジ マダラメイガ	だいず その他豆類	莢・子実	30茎(多発生の 場合は10茎でも 可)	散布:1回, 成熟期
	シロイチモジ ヨトウ	ねぎ	調査株全体	20株以上 葉ねぎで散播 や条播の場合 は, 面積当たり でも可	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後 直前・3日後に外観のみ 7・14日後は株を解体して調査
			調査株全体	15-20株 (5mの畝)	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
		やまのいも	茎葉	200葉	散布:1回, 虫数調査最終日
		えんどう	調査株全体	点播20株, 条播 3m以上	散布:3回, 散布直前・3・7日後
		花卉類	調査株全体	10株以上	
	ジャガイモガ	ばれいしょ	調査株全体, 葉 任意の株数において, マークした 5複葉からの5小葉	10-30株	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
			調査株全体	100個程度の種 芋	処理14日後 浸漬・粉衣処理:3回, 処理3・5・7日後

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 28)

調査項目・内容	備考	報告事項
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)・蛹数 全蛹数は評価に用いない (蛹化直前は移動性が高いため)		幼虫数(ステージ別)・蛹数 散布:補正密度指数 粒剂等:密度指数 *蛹数は除く
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)・蛹数		幼虫数(ステージ別)・蛹数 散布:補正密度指数 粒剂等:密度指数
全莢を解体し, 被害粒・被害莢調査	ダイズ・サヤムシガ・マヒメサヤムシガ	被害粒数・被害莢数・被害粒率・被害莢率 被害粒率・被害莢率の対無処理比
全莢を解体し, 被害粒・被害莢調査		被害粒数・被害莢数・被害粒率・被害莢率 被害粒率・被害莢率の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別) 調査は外観と解体を併用調査 発生の目安として, 野外発生卵塊調査も実施する		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
被害葉・被害株調査	他害虫の被害があるので注意	被害葉数・被害株数・被害葉率・被害株率 被害葉率・被害株率の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)・蛹数 払い落とし	A)虫数調査中心	幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
葉ごとの被害程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(1):被害が少程度 中(2):被害が中程度 多(3):被害が多程度	B)同時調査	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別) 食入虫は必要に応じて解体調査		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数 密度指数
被害葉(茎・芽・花)数と株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(1):被害が少程度 中(2):被害が中程度 多(3):被害が多程度	被害葉(茎・芽・花)率の対無処理比も同時に計算	指数別株数・被害度・被害葉(茎・芽・花)数・被害葉(茎・芽・花)率 被害葉(茎・芽・花)率・被害度の対無処理比
被害葉・被害株		被害葉数・被害株数・被害葉率・被害株率 被害葉率・被害株率の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
被害いも数	貯蔵害	被害いも数・被害いも率 被害いも率の対無処理比

備考中のアルファベット：

(調査法 29)

- A) 2つ以上調査項目があり, 判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり, 判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり, 状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
チ ョ ウ 目	タバコガ類*	トマト なす ピーマン うり類 オクラ 豆類	調査株全ての果実および落下した果実	10株(主枝)程度	散布:2回, 散布直前と散布7-10日後 自然発生の場合は3回程度散布
			調査株全体		散布:5回, 散布直前・3・5・7・14日後 状況によっては散布直前・1・3・5日後など
		キャベツ はくさい ブロッコリー しゅんぎく レタス	調査株全体	10-20株程度	散布(自然発生):5回, 散布直前・3・5・7・14日後 散布(放虫):4回, 散布直前・1・3・5日後
		アスパラガス		10株程度	
	花卉類	10-20株程度 植物の状況によって増減			
	オオタバコガ	とうもろこし	雌穂, 茎	20~30株	1回, 雌穂収穫(初期) 散布は雌穂絹糸抽出期に1回目
	ナガイモコガ	やまのいも	調査株全体, あるいは任意の調査面積	10株程度	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
	ナカジロシタバ	かんしょ	茎葉部	1-2m ² (1m ² の正方形の木枠を用いて)	散布:3回, 散布直前・3・7日後
	ネギコガ	ねぎ	調査株全体	50-100株	散布:2回, 散布直前・7-10日後 散布:2回, 散布前・虫数調査最終日
	ネキリムシ類*	だいこん はくさい キャベツ カリフラワー ブロッコリー レタス 各種作物	調査株全体	出来るだけ多く 放虫試験では 区内全株	播種時処理:4回, 発芽もしくは放飼1・3・5・7-10日後 生育期処理:5回, 処理直前・1・3・5・7-10日後
株周辺の地表面			被害株最終調査時		
枠内の放虫試験の場合: 3回, 処理1-2・4-5・7-10日後					
ハイマダラメイガ	だいこん はくさい キャベツ カリフラワー ブロッコリー あぶらな科野菜類	調査株全体	20-30株程度 〔解体調査は10株程度〕	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後 粒剤:4回, 処理7・14・21・28日後	
			20株以上	散布:1回, 散布7-10日後 粒剤:4回, 処理7・14・21・28日後	

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 30)

調査項目・内容	備考	報告事項
被害果数	(調査時に被害果は除去する) 自然発生の場合は被害主体	被害果数・被害果率 被害果率の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別) ※被害果に食入した幼虫も調査する	放虫試験の場合は虫数主体	幼虫数(ステージ別) 補正密度指数 密度指数
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別) 結球作物の自然発生の場合は収穫期解体虫数調査		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数 密度指数
	きく・ばら・カーネーション・トルコギキョウなど	
雌穂寄生数 被害雌穂数	A)寄生虫数調査中心 B)被害茎数調査 アワノメイガが混発した場合、可能な範囲で種別に分けて調査する	雌穂寄生虫数、被害雌穂数・率 雌穂寄生虫数・被害雌穂率の対無処理比
被害葉数	C)状況に応じて調査を検討	被害葉数・被害葉率 被害葉率の対無処理比
幼虫数	A)虫数調査中心	幼虫数 補正密度指数
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
葉に付着している蛹数	B)同時調査	蛹数 補正密度指数 密度指数
株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(1):1/8以下の被害 中(2):1/8-1/4未満の被害 多(3):1/4以上の被害	A)被害調査中心	指数別被害株数・被害度 被害度の対無処理比
株ごとの被害程度を3段階調査 無(0):被害無し 少(1):切断されていないが、被害有り 多(3):切断被害	A)被害調査中心 発芽株数と株元からの切断、成長点の被害生育初期に実施	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
種類を明らかにし、全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別) (掘取り)	C)状況に応じて調査を検討	幼虫数・蛹(ステージ別) 密度指数
土上面の死虫数(苦悶虫も死虫を含む)	B)同時調査	死虫数、累積死虫数 累積死亡数の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)・蛹数	虫数調査	幼虫数(ステージ別)・蛹数 補正密度指数
被害株数 被害程度に差がある場合はグレードわけをして被害程度を調査	被害調査 (芯部の被害と茎葉部の被害別)	被害株数・被害株率 被害程度を調査した場合被害度 被害株率の対無処理比 被害度の対無処理比

備考中のアルファベット：

(調査法 31)

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】	
チヨウ目	ハスモンヨトウ	トマト なす ピーマン きゅうり その他うり類 オクラ 豆科 ばれいしょ ごぼう しゅんぎく セルリー	調査株全体	10株(主枝)程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後	
		キャベツ レタス 結球あぶらな科葉菜類		20-30株程度		散布:1回, 虫数調査最終日
		ねぎ		20株以上 葉ねぎで散播 や条播の場合 は, 面積当たり でも可		散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
		さといも	10株程度	散布:1回, 虫数調査最終日		
		アスパラガス	立茎後の株全体		5-10株程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
		にんじん	調査株全体	20-40株程度		
		しょうが		10-20株程度		
		れんこん	茎葉	5茎葉程度		
		花卉類	調査株全体	10-20株程度 植物の状況に よって, 増減		
		かんしょ	茎葉部	1-2m ² (1m ² の正 方形の木枠を 用いて)		
		いちご	調査株全体	20株程度		
		マメシクイ ガ	だいず その他豆類	茎・莢・子実	30茎(多発生の 場合は10茎でも 可)	
		メイチュウ類*	さとうきび	調査株全体	-	散布:複数回, 植付14日後から7-10日間隔で

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 32)

調査項目・内容	備考	報告事項
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)	A)虫数調査中心	幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):食害無し 少(1):わずかに食害されている 中(2):外葉の食害は多いが、芯葉(結球部)は食害されていない 多(3):芯葉(結球部)まで食害が多い	C)状況にあわせて調査を検討	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)	自然発生卵塊数も調査が望ましい(発生の目安) A)虫数調査中心	幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):食害なし 少(1):食害が葉の10%以下 中(2):食害が葉の11%-30% 多(3):食害が葉の31%以上	C)状況に合わせて調査を検討 セスジズメ幼虫による食害と混同しないように注意	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数
全莢を解体し、被害粒・被害莢		被害粒数・被害莢数・被害粒率・被害莢率 被害粒率・被害莢率の対無処理比
発芽茎数・芯枯れ茎数 芯枯れ・不発芽株は掘取りで原因調査 植付芽は各区共に芽数・不良芽数を畝別に調査しておく		発芽茎数・芯枯れ茎数・芯枯れ茎率 芯枯れ茎率の防除価

(調査法 33)

備考中のアルファベット：

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
チヨウ目	ヨトウムシ	だいこん かぶ てんさい トマト しゅんぎく セルリー パセリ ほうれんそう 豆類 花卉類 非結球あぶらな科葉菜類	調査株全体	20-30株程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
		はくさい キャベツ 結球あぶらな科葉菜類		20-30株程度	
コウチユウ目	ウリハムシ	きゅうり メロン すいか その他うり類	調査株全体 被害増加程度が分かるよう調査部位を適宜工夫する。(全葉調査または調査葉をマークし固定する等)	10株程度 地這いの場合は、10つる程度	散布:3回, 散布直前・3・7日後 (成虫対象試験)
			根部		散布:1回, 無処理区で枯死株が現れ始めた頃 (幼虫対象試験)
			根域を含む土壌		
コウチユウ目	カメノコハムシ	てんさい	調査株全体	15-30株	散布:3回, 散布直前・3・7日後
	キスジノミハムシ	だいこん かぶ	調査株の根部	10-20株程度	2回, 播種30日後(根部肥大始期)・50-60日 (収穫期) 散布処理では, 発生始期から7日間隔2~3回 処理
あぶらな科葉菜類		葉	10-30株	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後	

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 34)

調査項目・内容	備考	報告事項
株ごとの被害程度を5段階調査 無(0):食害無し 少(1):小さな食痕が見られる 中(2):半数内外の葉に食痕があり、大きい食痕も点在する 多(3):ほとんどの葉に大きな食痕がみられる 甚(4):ほとんどの葉が網目状に食害されている	C)状況に応じて調査を検討	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)	A)虫数調査中心 参考として卵塊数も調査	幼虫数(ステージ別) 補正密度指数 密度指数
株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):食害無し 少(1):外葉がわずかに食害されている 中(2):外葉の食害は多いが、芯葉(結球部)は食害されていない 多(3):芯葉(結球部)まで食害が多い	C)状況に応じて調査を検討	指数別被害程度・被害度 被害度の対無処理比
成虫数	C)状況に応じて調査を検討 活発ではない午前8時以前に調査を行うとよい	成虫数 補正密度指数
成虫による株ごと(発生量によっては葉ごと)の被害程度を4段階調査 無(0):食害無し 少(1):食害面積が葉の25%以下 中(2):食害面積が葉の26-50% 多(3):食害面積が葉の51%以上	A)被害調査中心	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
幼虫による株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):食害無し 少(1):根部は食害されているが、茎葉は外観上健全に見える 中(2):根部の食害によって日中萎縮している 多(3):根部被害によって枯死	A)被害調査中心	
幼虫・蛹数 (掘取り) 株を中心に25-30cm平方、深さ5-10cm程度	C)状況に応じて調査を検討	幼虫数・蛹数 密度指数
幼虫数	A)虫数調査中心	幼虫数 補正密度指数
株ごとの被害程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(1):わずかな被害がある 中(2):葉面積の1/4以下 多(3):葉面積の1/2以下 甚(4):葉面積の1/2以上	C)発生状況によって調査を検討	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
株ごとの根部被害程度を4段階調査 無(0):食害無し 少(1):食害がわずかに認められる 中(2):食害痕がやや目立ち、品質はやや劣る 多(3):食害痕が多く、品質が劣る		指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
成虫数	C)発生の目安	成虫数
新葉数枚の被害痕数		被害痕数 対無処理比
株ごとの被害程度を5段階調査 無(0):被害無し 少(1):少々の被害 中(2):葉面積の1/4未満の被害 多(3):葉面積の1/2未満の被害 甚(4):葉面積の1/2以上の被害	A)発生状況に応じて痕数か被害程度を選択	被害株数・被害株率・指数別被害程度・被害度 被害株率・被害度の対無処理比

備考中のアルファベット：

(調査法 35)

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
コウチユウ目	コガネムシ類*	かんしょ	根茎部	10株以上	粒剤等:1回, 収穫期
			根茎部周辺の土壌	50×100cm程度 1ヶ所	
		らっかせい	調査株全体(地下部も含む)	地上部調査は 20株以上 莢被害調査は 5-10株	粒剤等:1回, 収穫期 調査が遅れると土中に子実が残るので, 時期を失しないようにする
			調査株周辺の土壌	1m ² 程度(試験区中央株の根圏)	
		いちご苗	全株調査	-	粒剤等:3回, 被害初期・最盛期・末期(定植前)
			調査株周辺の土壌	中央1m ² または全面	
		さとうきび	調査株全体	10株程度	立毛時処理の場合 収穫時1回
				区内全域	植付時処理の場合 複数回, 植付14日後から7-10日間隔
		なす ピーマン	根域の土壌	10株程度	粒剤等:2回, 処理直前・処理後30日程度
			根部		粒剤等:1回, 最終調査時
		やまのいも	根域の土壌	-	粒剤等:1回, 収穫期
			根部	10株程度	粒剤等:1回, 収穫期

*:類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字:主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 36)

調査項目・内容	備考	報告事項
いもごとの根部被害程度を4段階調査 無(0):食害無し 少(1):食害痕あるがA級品出荷可能なもの 中(2):B級品として出荷可能なもの 多(3):規格外となるもの	A)被害調査中心 A級, B級, 規格外は形状や他の害虫による要因は考慮しない	指数別被害いも数・被害度 被害度の対無処理比
幼虫数 所定面積の土20-30cm程度の深さまで掘り崩し, 種別・齢別で調査	C)状況によって調査を検討	幼虫数 密度指数
株被害調査は掘り上げる前に地上部の欠株・枯死・萎凋の状況とその株数 莢食害程度は掘り上げて莢ごとに4段階調査 無(0):食害はみとめられない 少(1):実の裏面のみ軽い食害がみられる 中(2):莢の食害が激しく, 一部に穴がある 多(3):莢の原型が壊れ, 中の子実まで食害される ※掘取り後, 水洗して莢ごとに	A)被害調査中心	被害株数 指数別莢数・食害度指数 食害度指数の対無処理比
幼虫数 (所定面積の土20-30cm程度の深さまで掘取り)	C)状況によって調査を検討 オオクロカゲ等が混発の場合は, その旨を記録する	幼虫数 密度指数
被害株(枯死株・萎縮株・生育不良株) 最終調査時は掘り上げて根の食害株数	A)被害調査中心	被害株数・枯死株数・萎縮株数・根食害株数・被害株率・枯死株率・萎縮株率・根食害株率 被害株率・枯死株率・萎縮株率・根食害株率などを含めた総被害株率の対無処理比
種別で幼虫数 (所定面積の土20-30cm程度の深さまで掘取り)	B)同時調査 ヒメコガネ・アオドウガネ等が混発した場合発生種別に記録	幼虫数 密度指数
株ごとの被害程度によって4段階調査 無(0):食害痕無し 少(1):食害痕がすこしあるもの 中(2):芽または根帯・茎のいずれかに食害があるもの 多(3):茎・芽・根帯の全てに食害があるもの	A)圃場選定時に2~3株掘りとして幼虫密度を調べるのが望ましい	指数別株数・被害度指数 被害度指数の対無処理比
種別で幼虫数 (掘取り)	B)同時調査	幼虫数 密度指数
発芽茎数・芯枯れ茎数を畦別に調査 芯枯れ茎・不発芽苗は掘りとして原因を調べる	A)植付前に苗の芽数・根帯数を数えておく 圃場は誘餌法(1㎡区画当たり4畦にサトウキビ苗を埋め込んで7~10日後に掘り取り幼虫数を数える)で事前調査が望ましい	被害茎数・芯枯れ茎数・被害茎率 被害茎率の防除価
種別で幼虫数 (掘取り)	B)同時調査	幼虫数 密度指数
株ごとの根被害程度を4段階で調査 無(0):被害無し 少(1):わずかな被害がある 中(2):明らかな被害がある 多(3):酷い被害がある	A)被害調査中心	指数別被害程度・被害度 被害度の対無処理比
種別で幼虫数を調査 (掘取り)	B)同時調査	幼虫数 密度指数
株ごとの根被害程度を4段階調査 無(0):被害痕が無い 少(1):被害痕1-2ヶ所 中(2):被害痕3ヶ所以上 多(3):著しい被害がある	A)被害調査中心	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比

備考中のアルファベット:

(調査法 37)

A) 2つ以上調査項目があり, 判定の主たる調査

B) 2つ以上調査項目があり, 判定の参考となる調査

C) 2つ以上調査項目があり, 状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
コウチュウ目	コガネムシ類*	にんじん	根部	30-60株程度	粒剤等:1回, 収穫期
			根域の土壌	-	
		花卉類 樹木類	根域の土壌	10株程度 (状況に合わせて株数の増加を検討)	粒剤等:1回, 作物により, 処理30日前後ないしそれ以上
			根部		
	テントウムシ ダマシ類*	なす トマト ピーマン とうがらし類	各株の全葉調査が望ましく, 株が大きい場合は任意の2枝を選び, その全葉について調査を行う	10株程度	散布:1回, 虫数調査最終日
			各区任意の株全体を調査する		散布:3回, 散布直前・3・7日後 粒剤等:4回, 定植7・14・21・28日後
		ばれいしょ	各株の全葉調査が望ましく, 株が大きい場合は任意の2枝を選び, その全葉について調査を行う.	10-20株程度	散布:1回, 虫数調査最終日
	ナストビハムシ	ばれいしょ	塊茎部(1区25個程度)	10株程度	散布:1回, 収穫期
			調査株全体	25株程度	散布:1回, 成虫の発生後期の7月上旬
	フタスジヒメハムシ	だいず	茎葉	100茎 30株程度	散布:5回, 散布直前・7・14・21・28日後 あるいは, 発生盛期から経時的に複数回調査
			莢・子実	10茎	散布:1回, 収穫期
			葉	20-80茎程度	散布:2-3回, 処理20-40日後
			根部	10-20株程度	粒剤等:1-2回, 播種30-50日後 粒剤等:根粒被害調査と同時調査

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 38)

調査項目・内容	備考	報告事項
被害株数	A)被害調査中心	被害株数・被害株率 被害株率の対無処理比
種別で幼虫数 (掘取り)	B)同時調査	幼虫数 密度指数
種別で幼虫数 (掘取り)	B)同時調査	幼虫数 密度指数
株ごとの根被害程度を4段階調査 無(0):被害痕が無い 少(1):被害痕1-2ヶ所 中(2):被害痕3ヶ所以上 多(3):著しい被害がある	A)被害調査中心	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
葉ごとの被害程度を4段階調査 無(0):被害痕がない 少(1):被害痕症状が葉の10%以下 中(2):被害痕症状が葉の11%-30% 多(3):被害痕症状が葉の31%以上	C)虫数が少ない場合	指数別葉数・被害度 被害度の対無処理比
調査株の成虫数・幼虫数(若齢・中齢・老齢)・蛹数・卵塊数	A)虫数調査中心	成虫数・幼虫数(ステージ別)・蛹数・卵塊数 補正密度指数 密度指数 (卵塊は除く)
葉ごとの被害程度を5段階調査 無(0):食害無し 少(1):食害面積が1/4以下 中(2):食害面積が1/4-1/2 多(3):食害面積が1/2-3/4 甚(4):食害面積が3/4以上	C)虫数が少ない場合	指数別葉数・被害度 被害度の対無処理比
塊茎の被害程度を5段階調査 無(0):食痕無し 少(1):食痕数1-5個 中(2):食痕数6-10個 多(3):食痕数11-20個 甚(4):食痕数21個以上	状況に合わせて調査法を選択 (幼虫の被害)	指数別被害程度・被害度 被害度の対無処理比
株ごとの被害程度を5段階調査 無(0):食害無し 少(1):食害面積が1/4以下 中(2):食害面積が1/4-1/2 多(3):食害面積が1/2-3/4 甚(4):食害面積が3/4以上	状況に合わせて調査法を選択 (成虫の被害)	指数別被害程度・被害度 被害度の対無処理比
成虫数 (払い落とし法)	地域によって被害実態が異なるため、地域にあつた試験方法を選択して調査を行うと良い 東北・北陸:成虫による莢や粒への被害が多い 東山東海:幼虫による根粒食害によって、生育抑制などの被害が見られる	成虫数 密度指数
被害莢数・被害粒数		被害莢数・被害粒数・被害莢率・被害粒率 被害莢率・被害粒率の対無処理比
小葉被害数		小葉被害数・小葉被害率 小葉被害率の対無処理比
根粒被害数		根粒被害数・根粒被害率 根粒被害率の対無処理比
幼虫数 (掘取り)		幼虫数 密度指数

(調査法 39)

備考中のアルファベット：

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
コウチユウ目	ヒョウタンゾウムシ類	ごぼう	調査株全体	10-30株	散布:複数回処理等があるので調査時期は臨機対応
			根部		粒剤等:1回, 収穫期
		かんしょ	地下茎部	100-200いも	粒剤等:1回, 収穫期
		にんじん	調査株全体	50-100株	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
	根部		散布:1回, 収穫期		
ハリガネムシ類(コメツキ)*	さとうきび	調査株全体	-	粒剤等:複数回, 植付14日後から7-10日間隔で	
ハエ目	クロバネキノコバエ類*	いちご にら ねぎ 花卉類 (施設作物)	根部を含む土壌	5-40株 作物によって対応	散布:3回, 散布直前・7・14日後 粒剤等:5回, 処理前・7・14・21・28日後
	ダイズサヤタマバエ	だいず 豆類	茎・莢・子実	30茎(多発生の場合は10茎でも可)	散布:1回, 子実肥大期
	タネバエ	きゅうり その他うり類 (直播栽培)	全粒(株)掘取り	5-10m ²	粒剤等:1回, 本葉が抽出する直前
			だいず その他豆類 とうもろこし	種子(株)	播種全粒
		だいこん	根部	30-50本	粒剤等:処理20-40日後
			キャベツ	根部および周辺土壌	10株程度
		根部		10-20株程度	
	ねぎ	調査株全体	200-300株	粒剤等:定植7-50日後程度までの複数回	

* : 類表示の害虫種については、発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字：主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 40)

調査項目・内容	備考	報告事項
成虫数		成虫数 密度指数
株ごとの根被害程度を5段階調査 無(0):被害無し 少(1):食害痕1-2個程度 中(2):食害痕はあるが、その数は少ない 多(3):食害痕多数 甚(4):食害痕が全体にあり、被害が顕著	A)被害調査中心	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
いもごとの被害程度を5段階調査 無(0):被害痕無し 少(1):被害痕が1-2ヶ所 中(2):被害痕が3-6ヶ所 多(3):被害痕が7-15ヶ所 甚(4):被害痕が16ヶ所以上		指数別いも数・被害度 被害度の対無処理比
成虫数		成虫数 密度指数
株ごとの根被害程度を3-4段階調査 3段階の場合 無(0):被害無し 少(1):被害痕が1-2ヶ所程度 多(2):被害痕が3ヶ所以上		指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
4段階の場合 無(0):被害無し 少(1):被害痕が1ヶ所 中(2):被害痕が2-3ヶ所程度 多(3):被害痕が4ヶ所以上		
無(0):被害無し 少(1):被害痕が1ヶ所 中(2):被害痕が2-3ヶ所程度 多(3):被害痕が4ヶ所以上	植付時処理では事前に誘餌法(1㎡区画当たり4畦にサトウキビ苗を埋め込んで7~10日後に掘り取り幼虫数を数える)で事前調査が望ましい 立毛時試験では成虫発生状況を把握しておくとうい	発芽茎数・発芽茎率・芯枯れ茎数・芯枯れ茎率 発芽茎率・芯枯れ茎率の対無処理比
幼虫数 (掘取り後に水洗もしくは70%エタノールを噴霧して抽出)		幼虫数 補正密度指数
全莢を解体し、被害粒・被害莢	子実硬化直前の調査が望ましい	被害粒数・被害莢数・被害粒率・被害莢率 被害粒率・被害莢率の対無処理比
掘取り後に被害粒(株)調査 A:健全に発芽 B:食害されて不発芽 C:発芽後に食害 D:タネバエ以外の原因による不発芽		発芽数・不発芽数・被害粒(株)数(B+C)・被害粒(株)率 被害粒(株)率の対無処理比
	播種時被害	
被害根数	生育期被害	被害根数・被害根率 被害根率の対無処理比
幼虫数・蛹数		幼虫数・蛹数 密度指数
被害株数		被害株数・被害株率 被害株率の対無処理比
被害株		

備考中のアルファベット：
 (調査法 41) A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
 B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
 C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
ハエ目	タマネギバエ	たまねぎ	調査株全体	100株 苗床の場合 300-500株	苗床は2回、散布直前・7-10日後 本圃は7-10日間隔6-7回
	ハモグリバエ類*	トマト なす いんげん	各区中央10株程度を選び、調査株とする	10株程度	散布:1回、散布後適当な時期
			全生虫の摂食・産卵痕や小マインのみが認められる葉またはマインが認められなくなる葉位から生長点方向に展開葉を5-10葉選んでマークした葉		散布:3回、散布直前および7日後、14日後残効が長い・遅効性・粒剤処理等は21日後の調査を追加する
		きゅうり メロン すいか その他うり類	摘芯直前少発生:全展開葉 摘心直前多発生:マインの少ない上位葉を中心に3-5葉を選びマーク 摘芯後少発生:全展開葉 摘芯後多発生:1株の下位・中位・上位から1-2葉を選びマーク	5-10株程度 地這いの場合は、10つる程度	散布:3回、散布直前および7日後、14日後残効が長い・遅効性・粒剤処理等は21日後の調査を追加する 施用は脱出潜孔数が葉当たり1個程度の低密度時期からの実施が望ましい
			処理葉(枝・株)全体を網掛け	10株以上	散布:1回、散布後適当な時期
	あぶらな科野菜類 セルリー レタス しゅんぎく	全葉あるいは任意の展開葉を3-5葉程度を選びマークした葉	10株程度	散布:3回、散布直前・7・14日後	
	てんさい	葉	10-20株程度	散布:2回、散布7・14日後 粒剤等:発生期に複数回	
	たまねぎ ねぎ	調査株全体	50-100株	散布:2回、散布直前・7-10日後 粒剤等:複数回、育苗期・定植時処理は7-10日後、7日間隔で30日頃まで	
		上位3葉/株	10-100株 (発生量に合わせて)	散布:3回(4回)、散布直前・(3)・7・14日後 粒剤等:複数回、育苗期・定植時処理は7-10日後、7日間隔で30日頃まで	
	ハチ目	カブラハバチ類	あぶらな科野菜類	調査株全体	10-20株
チュウレンジハバチ		樹木類	葉	1-2枝(1樹) 状況によって調査範囲・面積を検討	散布:3回(4回)、散布直前・3・7・(14)日後

* : 類表示の害虫種については、発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 42)

調査項目・内容	備考	報告事項
被害株数	最終調査時に掘取りで被害確認	被害株数・被害株率 被害株率の対無処理比
幼虫が寄生している処理葉への袋をかけ数日後に脱出幼虫を室内に持ち帰り蛹化率・羽化率を調査	C)状況に応じて調査を検討 IGR剤などの阻害剤では実施が望ましい	脱出幼虫数・蛹化数・羽化数・蛹化率・羽化率 蛹化率・羽化率の対無処理比
マイン数を3段階調査(計算式は備考参照) 小マイン:長さ3cm以下 中マイン:長さ3cm以上蛹化脱出直前 大マイン:蛹化脱出後 計算には中・大マインの合計を用いる	A)被害調査中心 防除値=100-[(処理区マイン数)÷(無処理区マイン数)×100] ただし散布直前に被害があった場合 防除値=100-[(処理x日後の処理区マイン数-処理直前のマイン数)÷(処理x日後の無処理区マイン数-処理直前の無処理区マイン数)×100]	サイズ別マイン数 防除値
幼虫が寄生している処理葉への袋をかけ数日後に脱出幼虫を室内に持ち帰り蛹化率・羽化率を調査	C)状況に応じて調査を検討 IGR剤などの阻害剤では実施が望ましい	脱出幼虫数・蛹化数・羽化数・蛹化率・羽化率 蛹化率・羽化率の対無処理比
マインを3段階調査 小マイン:1cm未満 中マイン:1cm以上, 3cm未満 大マイン:3cm以上		サイズ別マイン数, 合計数 (処理後マイン合計数-処理前マイン合計数) 合計数の対無処理比
被害葉数・株数	テンサイモグリハナバエの場合	被害株数・被害葉数・被害株率・被害葉率 被害株率・被害葉率の対無処理比
被害程度を5段階調査 無(0):被害無し 少(1):1-3ヶ所被害 中(2):4-10ヶ所被害 多(3):11ヶ所以上被害, 計数可能 甚(4):被害多数, 計数不可能	アシシロハモグリバエの場合	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
被害程度を4段階調査 無(0):被害無し 少(1):被害が10%以下 中(2):被害が11-30%以下 多(3):被害が31%以上		指数別株数・被害度指数 被害度指数の対無処理比 バイオタイプ
マイン数を3段階調査 小マイン:長さ3cm以下 中マイン:長さ3cm以上蛹化脱出直前 大マイン:蛹化脱出後		サイズ別マイン数, 合計数 マイン増加数の対無処理比 バイオタイプ
幼虫数		幼虫数 補正密度指数 密度指数 バイオタイプ
全生幼虫数(若齢・中齢・老齢別)		幼虫数(ステージ別) 補正密度指数 密度指数
幼虫数		幼虫数 補正密度指数

備考中のアルファベット：

(調査法 43)

- A) 2つ以上調査項目があり, 判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり, 判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり, 状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
バ ン タ 目	コオロギ	各種作物	調査株全体	出来るだけ多く	播種時処理:4回, 発芽もしくは放飼1・3・5・7-10日後 生育期処理:5回, 処理直前・1・3・5・7-10日後
					枠試験の場合:3回, 処理1-2・4-5・7-10日後
ダ ニ 目	トマトサビダ ニ	トマト	被害が顕在した葉周辺の葉 (小葉10-20葉程度)	5m ² 程度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後
			被害葉から直上2-3枚の未被 害複葉をマーク (10複葉程度)	5m ² 程度	複数回・散布後7日間隔で2-4回
	ネダニ類*	らっきょう	掘取り球根	10株以上	1回, 収穫期
				5株各2球 計10球	2-3回, 処理直前(種球の寄生生虫数を確認) および定植1-2ヶ月頃 必要に応じて収穫期調査
ダ ニ 目	ハダニ類*	トマト なす ほおずき	株の上・中位葉から各1-2枚選 び調査する 発生が不均一の場合はマーク 葉を調査	10株(主枝)程 度 地這いの場合 は10つる程度	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
		ピーマン とうがらし類	株の上・中位葉から各5-10枚 選び調査する 発生が不均一の場合はマーク 葉を調査		
		きゅうり メロン すいか その他うり類	株の上・中・下位葉から各1枚 選び調査する 発生が不均一の場合はマーク 葉を調査		
	ほうれんそう	最外葉から2-3枚目の葉	20-40葉		
	さといも かんしょ やまのいも	調査株全体 多発生の場合は株当たり1-2 葉	10株程度		
	だいず 豆類	任意の上・中位葉	30-50小葉	散布:1回, 虫数調査最終日	

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 44)

調査項目・内容	備考	報告事項
株ごとに被害程度を3段階調査 無(0):被害無し 少(1):切断されていないが、被害有り 多(3):切断被害	A)被害調査中心 発芽株数と株元からの切断、成長点の被害 生育初期に実施	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
枠試験の場合:土上面の死虫数 ※苦悶虫は死虫に含む	B)同時調査	死虫数(生存数)、死虫率(生存率) 累積死虫率(生存率)の対無処理比
全生虫数(成虫・幼虫)	採集した葉を実体顕微鏡下で虫数調査 生死の判別が困難な場合は、つついて歩行 の有無で判断する	成虫数・幼虫数 補正密度指数
複葉ごとに被害程度を5段階調査 無(0):被害無し 少(0.5):複葉の一部の小葉が黄化または褐変して いる 中(1):複葉の1/2未満の小葉が枯死 多(3):複葉の1/2以上の小葉が枯死、または複葉 全体が黄化・褐変 甚(5):複葉全体が枯死	天敵が発生した場合は被害が進まないこと があるので、その場合は虫数調査を重視す る	指数別複葉数・被害度 被害度の対無処理比
株ごとの根被害程度を4段階調査 無(0):被害を全く認めない 少(1):寄生による腐敗根がわずかに認められる 中(2):寄生による腐敗根が中程度 多(3):寄生による腐敗根がひどく、正常根がほとん ど認められない	C)状況に応じて調査を検討 植付前にツルグレン法で抽出調査調査を行 う	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
掘取り後、実体顕微鏡下で分解し、寄全生虫数 (成虫・若虫・幼虫)調査または、ツルグレン法で抽 出調査	A)虫数調査主体 分解調査の場合、ネグニは球根の皮下、発 根部、腐敗根内部に多いため、調査はその 部位を中心に行う 植付前にツルグレン法で抽出調査調査を行 う	成虫数・若虫数・幼虫数 補正密度指数
雌成虫数(種別・色彩型別で)		雌成虫数 補正密度指数 密度指数
	A)虫数調査中心	
葉ごとの被害程度を4段階調査 無(0):被害症状なし 少(1):被害症状が葉の1/4以下 中(2):被害症状が葉の約1/4-1/2 多(3):被害症状が葉の1/2以上	C)状況に応じて調査を検討	指数別葉数・被害度 被害度の対無処理比

備考中のアルファベット：

(調査法 45)

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
ダニ類	ハダニ類*	いちご	一株当たり任意の2-3小葉 発生が不均一の場合はマーク 葉を調査	10株程度	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
			調査株全葉	20-30株	散布:1回, 虫数調査最終日
		花卉類 ホップ	小さい株の場合は全葉 大きい株の場合は任意のマー ク葉など	10株程度	散布:4回, 散布直前・3・7・14日後
	ハウレンソウ ケナガコナダ ニ	ほうれんそう	中心部展開葉(2cm以上)4葉お よび芯部	調査区内からま んべんなく抽出 した100株	散布:1回, 収穫期
			調査株全体	10-20株程度	散布:1回, 収穫期
			周辺の土壌	-	散布:5回, 播種直前, 第1回処理直前, 第2回 処理直前, 7-10日後, 収穫期 粒剤等:4回, 処理直前, 10日後, 20日後, 収 穫期
ホコリダニ類*	なす きゅうり その他うり類	区内任意の上位葉から直径15 mm程度の葉円盤10-20枚	10株(主枝)程 度	散布:3回(4回), 散布直前・3・7・(14)日後	
	ピーマン とうがらし類	区内任意の上位葉から葉10- 20枚			
セン チ ユウ	イチゴメセン チュウ	いちご	いちご苗の芽	10株以上	散布:3回, 処理直前・最終散布3-10・30-60 日後
				30株以上	散布:1回, 最終散布30-60日後

* : 類表示の害虫種については、発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字：主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 46)

調査項目・内容	備考	報告事項
雌成虫数	A)虫数調査中心	雌成虫数 補正密度指数
株ごとに被害程度を4段階調査 無(0):被害(食痕)症状なし 少(1):被害(食痕)症状のある葉が株全体の10%以下 中(2):被害(食痕)症状のある葉が株全体の11-30% 多(3):被害(食痕)症状のある葉が株全体の31%以上	C)状況に応じて調査を検討	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
雌成虫数		雌成虫数 補正密度指数 密度指数
株ごとに被害程度を4段階調査 無(0):被害なしの株数 少(0.5):コナダニによる奇形葉2枚以内の株数 中(3):奇形葉3-4枚で褐変なしの株数 多(5):奇形葉の数にかかわらず中心部が褐変し芯止まりの株数	A)被害調査中心	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
全生虫数(成虫・幼若虫) 実体顕微鏡下で植物を解体しながら、虫数調査(発育ステージを分ける必要はない) (間引時にも調査することが望ましい) 虫数が多い場合は、エタノール抽出等調査	C)状況に応じて調査を検討	
試験区任意の5か所以上から採土(深さ5cmから100ml程度)し、ツルグレン法で分離して調査		成虫数・幼若虫数 密度指数
試験区任意の5か所以上からチャック付きビニール袋に採土(深さ5cmから100ml程度)する。採集した土に捕獲用トラップを設置し、20℃全暗条件で3日間静置した後、トラップを回収しコナダニを実体顕微鏡下で調査(春日法)	B)いずれかを選択	
全生虫数(ステージ別)	採集した葉もしくは葉円盤を実体顕微鏡下で虫数調査 生死の判別が困難な場合は、つついて歩行の有無で判断する	成虫数・幼虫数 補正密度指数
芽を採集した後に、水中で裁断し、ベルマン法で分離して個体数調査	B)同時調査	センチウ数 補正密度指数
被害株調査 芽・葉の被害程度を5段階調査 無(0):健全 少(1):新葉や芽にわずかに症状がみられる 中(2):新葉や芽に明らかな症状がみられる 多(3):新葉や芽が著しく奇形を呈するか赤変しているもの 甚(4):新葉が抽出せず枯死状態のもの	A)被害調査中心	被害株数・被害株率・指数別被害程度・被害度 被害株率・被害度の対無処理比

備考中のアルファベット：

(調査法 47)

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
センチュウ	シストセンチュウ類*	だいず	根部を含む土壌	15-30株	くん蒸剤等:処理直前・播種時および収穫期の3回 粒剤等(播種時処理の場合は):2回
			根部		粒剤等:1回, 収穫期
			調査株全体		
		ばれいしょ	根部を含む土壌	10-20株	くん蒸剤等:処理直前・植付時および収穫期の3回 粒剤等(播種時処理の場合は):2回
			根部		粒剤等:1回, 収穫期
		ネグサレセンチュウ類*	だいこん	調査株の根部	20株程度
	根域土壌			-	くん蒸剤等:処理直前・播種時および収穫期の3回 粒剤等(播種時処理の場合は):2回
	さといも		いも	10株以上	粒剤等:1回, 収穫期
			根域土壌		くん蒸剤等:4回, 処理直前・植付直前・生育中期・球茎掘取り 粒剤等:3回, 粒剤等で処理と植付が同時の場合
	いちご		細根	-	粒剤等:1回, 最終調査
			周辺の土壌		粒剤等:3回, 処理直前・植付時・栽培終了時

*:類表示の害虫種については、発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字:主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 48)

調査項目・内容	備考	報告事項
センチュウ卵密度(採土か所の詳細明記) 各5ヶ所より採土し、ふるい分け流し法により抽出したシストを破碎し、蒸留水10ml中1mlから卵数を計算	B)同時調査	卵密度 補正密度指数
シスト寄生程度を5段階調査 無(0):シストがない 少(1):数個のシストが認められる 中(2):シストが散見され、はっきりと認められる 多(3):シストが多数認められる 甚(4):シストが根全体にわたり多数認められ、密集している	A)被害調査中心 主な調査の他に、草丈、株重、莢数、莢重なども同時調査する機会が多い	指数別株数・シスト寄生程度 シスト寄生程度の対無処理比
株重から被害程度を5段階調査 無(0):健全 少(1):わずかに症状が認められる 中(2):明らかに症状が認められる 多(3):著しい症状が認められる 甚(4):甚だしく生育が劣る	C)状況に応じて調査を検討	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
センチュウ卵密度(採土か所の詳細明記) 各5ヶ所より採土し、ふるい分け流し法により抽出したシストを破碎し、蒸留水10ml中1mlから卵数を計算	B)同時調査	卵密度 補正密度指数
シスト寄生程度を5段階調査 無(0):シストがない 少(1):数個のシストが認められる 中(2):シストが散見され、はっきりと認められる 多(3):シストが多数認められる 甚(4):シストが根全体にわたり多数認められ、密集している	A)被害調査中心 主な調査の他に、草丈、株重、いも重なども同時調査する機会が多い	指数別株数・シスト寄生程度 シスト寄生程度の対無処理比
根部被害程度を5段階調査 無(0):被害痕がない 少(1):被害痕少 中(2):被害痕中 多(3):被害痕多 甚(4):被害痕甚	A)被害調査中心	指数別株数・被害度指数 被害度指数の対無処理比
試験区任意の5か所以上から採土し、混和後にベルマン法(土壌20-50g, 2-3反復, 室温で2日間)で分離して調査する。採土(深さ10-20cmから300-500g程度)	B)同時調査	センチュウ数 補正密度指数
球茎を掘上げ、褐変程度を5段階調査 無(0):褐変を全く認めない 少(1):赤褐色-褐色斑点をわずかに認める 中(2):赤褐色-褐色斑点が多数認められる 多(3):多数の赤褐色-褐色斑点が融合した不定形大型斑紋が混在 甚(4):球茎表面50%以上が大型斑紋によって覆われている	A)被害調査中心	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比
試験区任意の5か所以上から採土し、混和後にベルマン法(土壌20-50g, 2-3反復, 室温で2日間)で分離して調査する。採土(深さ10-20cmから300-500g程度)	B)同時調査	
任意の5株から合計2gの細根を採集し、ミキサーで裁断した後にベルマン法(2-3反復)で分離後、線虫密度を調査 (500mlの水に入れ、10秒間ミキシング)		センチュウ数 補正密度指数 密度指数
試験区任意の5か所以上から採土し、混和後にベルマン法(土壌20-50g, 2-3反復, 室温で2日間)で分離して調査する。(深さ10-15cmから300-500g程度)		

備考中のアルファベット：

(調査法 49)

A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査

B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査

C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

虫種目	害虫名	作物名	調査部位	調査株数 面積 (1区当たり)	調査回数・期間 【施用にあたっての留意点】
センチュウ	ネコブセンチュウ類*	トマト なす ピーマン きゅうり メロン すいか かんしょ らっかせい その他豆類 その他うり科類 あぶらな科野菜類 ごぼう ねぎ ばれいしょ やまのいも レタス 花卉類	調査株の地下部	10株以上	粒剤等:1回, 収穫期
			周辺の土壌	-	くん蒸剤等:3回, 処理直前・定植直前および掘上調査時の3回が原則 粒剤等:2回, 処理と定植が同時の場合は2回
		にんじん オクラ ほうれんそう	調査株の地下部	20株以上 状況に応じて, 株数を増やす	粒剤等:1回, 収穫期
その他	ナメクジ・マイマイ類*	各種作物	調査株全体	10株程度 (状況に合わせて株数の増加を検討)	散布・粒剤等:4回, 処理1・3・5・7日後 (状況に合わせて調査間隔は臨機対応)

* : 類表示の害虫種については, 発生種および供試虫種を明らかにすること

ボールド字 : 主に新農業実用化試験で効果判定に用いる値

(調査法 50)

調査項目・内容	備考	報告事項
根部表面の根こぶを5段階調査 無(0):根系全体に根こぶを全く認めない 少(1):こぶをわずかに認める 中(2):こぶの形成が中程度 多(3):こぶの数が多い 甚(4):こぶが特に多く、かつ大きい	A)根こぶ調査中心	指数別株数・根こぶ指数 根こぶ指数の対無処理比
試験区任意の5か所以上から採土し、混和後にベルマン法(土壌20-50g, 2-3反復, 室温で2日間)で分離して調査する(深さ10-15cmから300-500g程度)	B)同時調査	センチュウ数 補正密度指数 密度指数
根部表面の根こぶを5段階調査 無(0):根系全体に根こぶを全く認めない 少(1):こぶをわずかに認める 中(2):こぶの形成が中程度 多(3):こぶの数が多い 甚(4):こぶが特に多く、かつ大きい	A)根こぶ調査中心	指数別株数・根こぶ指数 根こぶ指数の対無処理比
個体数	枠試験	生存個体・死亡個体・死亡率(生存率) 死亡率(生存率)の対無処理比
被害株数・被害痕数	被害が少ない場合	被害株数・被害株率・被害痕数 被害株率の対無処理比
被害程度を4-5段階調査 無(0):被害無し 少(1):被害が少程度 中(2):被害が中程度 多(3):被害が多程度 甚(4):被害が甚程度	A)被害調査中心	指数別株数・被害度 被害度の対無処理比

(調査法 51)

備考中のアルファベット：

- A) 2つ以上調査項目があり、判定の主たる調査
- B) 2つ以上調査項目があり、判定の参考となる調査
- C) 2つ以上調査項目があり、状況に応じて調査を検討する場合

【判定基準】殺虫剤関係

1. 稲・野菜関係の場合の判定基準

対 対 照

概評の記号	効果の判断	計算法	判 定 基 準		注
			一般害虫	土壌線虫類	
A	効果がまさる	①	+5 以上	+10 以上	アブラムシ類, ハダニ類, チャノホコリダニは, 一般 害虫の判定基準に含まれま す。
		②	-5 以下	-10 以下	
B	効果がほぼ同等	①	±5	±10	
		②	±5	±10	
C	効果がやや劣る	①	-5~-20	-10~-30	
		②	+5~+20	+10~+30	
D	効果が劣る	①	-20 以下	-30 以下	
		②	+20 以上	+30 以上	

〈計算法〉

- ①：判定に用いた数値が，防除効率，補正死亡率などの場合（無処理を0とした時の指数）の供試薬剤と対照薬剤の指数の差
- ②：判定に用いた数値が，対無処理比，補正密度指数などの場合（無処理を100とした時の指数）の供試薬剤と対照薬剤の指数の差

対無処理

概評の記号	効果の判断	計算法	判 定 基 準		
			一般害虫	アブラムシ類・ハダニ類・チャノホコリダニ	土壌線虫類
A	効果は高い	①	90以上	95以上	75以上
		②	10以下	5以下	25以下
B	効果はある	①	70~90	85~95	50~75
		②	10~30	5~15	25~50
C	効果は認められるが その程度はやや低い	①	50~70	70~85	25~50
		②	30~50	15~30	50~75
D	効果は低い	①	50以下	70以下	25以下
		②	50以上	30以上	75以上

*ただし，世代を繰り返し定着する天敵農薬・二次感染が期待できる微生物農薬については，アブラムシ類・ハダニ類・チャノホコリダニであっても一般害虫として扱う。

〈計算法〉

- ①：判定に用いた数値が，防除効率，補正死亡率などの場合（無処理を0とした時の指数）の供試薬剤の指数
- ②：判定に用いた数値が，対無処理比，補正密度指数などの場合（無処理を100とした時の指数）の供試薬剤の指数